

# ゲーテの「自然詩」における生命哲学

ツグラッゲン・エヴェリン

## 目次

### はじめに

#### 第1章 ゲーテの詩学に関して

##### 第1節 ゲーテは詩人たちの師か解放者か？

##### 第2節 詩人と芸術家という概念、そして詩や芸術や学問という概念の定義について

#### 第2章 ゲーテの「自然詩」における生命哲学

##### 第1節 詩作は詩人が内面から制作する自然的な過程

##### 第2節 ゲーテの「自然詩」

##### 第3節 ゲーテの「自然詩」における生命哲学

#### 第3章 「自然詩」における詩人の振る舞いについて

##### 第1節 「自然詩」における自制心の役割について—否定するものを排除する

##### 第2節 詩の内容は自己の生活の内容である

##### 第3節 うぬばれ—「自然詩」においても望ましくない特質

#### 第4章 自由と前進する生

##### 第1節 自由の公言は思い上がりである

##### 第2節 前進する生を支えとする

### おわりに

### 注・参考文献

## はじめに

詩という文学的芸術において哲学を表現することができるかどうかという問題が筆者の基本的な問いである。もし可能であるならば、詩に表される哲学とはどういう哲学であろうか。本稿はこの問題に対し、筆者なりの観点から近づいてみたい。まず詩、詩作においてある哲学を見つけることができるかどうかを調べていく。詩の中に哲学が表されているかどうかという問いを調べるのに、この二つ目の観点から調べていった方が容易だと思われる。詩という文学的芸術の中で哲学を表現することができるかどうかという問い、そして詩・詩作において哲学があるかどうかという問い、この両方の問いが互いに包括するかどうかを、本稿で調べていきたい。

この問いを調べるのにゲーテの詩は適切である。ゲーテ自身は自分の考え方や思想をよく詩の中に示している。したがって彼の詩・詩作において哲学が見出されるように思われるのであるが、どのような哲学を見出すことができるであろうか？

本稿ではゲーテの書物、特にゲーテの「文学論」からの随筆「さらに一言、若い詩人たちのために」<sup>1</sup>に基づいて、上記の問題を検討してみたい。随筆「さらに一言、若い詩人たちのために」は、ゲーテの詩・詩作に秘められている哲学の概観が示されていると思われる。したがって本稿ではこの随筆を中心に検討することとした。

本稿では、第1章において、まずゲーテは詩人の世界の中で自分をどう位置付けているかについて述べ、次に芸術家や詩人、そして詩や芸術や学問という概念の定義について論じていく。第2章では、まず詩作は詩人が内面から制作する自然的な過程であることについて述べ、次にゲーテの「自然詩」という概念を検討し、そしてゲーテの「自然詩」における生命哲学を明らかにする。そして第3章では、「自然詩」における詩人の振る舞い、とくに自制心とうぬぼれについて述べ、「自然詩」の内容を明らかにする。最後に第

4章では、ゲーテは詩人たちには内面から制作する自由を示したが、この自由に対し詩人たちはどうすべきかについて論じ、詩人たちに示した自由の他に他の規範があるかどうかについてみていく。

翻訳に関しての注釈であるが、ドイツ語の Poesie と Dichtung という言葉を「詩」と「詩作」とし、poetisch を「詩的」と翻訳した。Poesie と poetisch は潮出版社のゲーテ全集では「文学」と「文学の」と翻訳されている個所があるので、本稿でこの全集を使用する場合は、この言葉だけ入れ替えた。「文学」と「文学の」はドイツ語で Literatur と literarisch に該当する。Literatur は Poesie よりもっと広い意味がある。Literatur は詩だけではなく、一般的文学を含んでいる。ゲーテがここで使っている Poesie の意味は「詩」と「詩作」に限られていて、「文学」一般の意味は含まれていない。この故に Poesie の訳としての「文学」はここでは適切ではない。ゲーテの Naturdichtung という概念も、潮出版社のゲーテ全集では「自然文学」と訳されているが、本稿では「自然詩」と訳した。本稿の「自然詩」という概念は、第2章でも述べるように、詩作は自然なプロセスであるという意味を含んでいる。

## 第1章 ゲーテの詩学に関して

「さらに一言、若い詩人たちのために」という随筆の中でゲーテは詩学について書き、若い詩人に詩作について指導している。まずゲーテは詩人の世界の中に自分をどう位置付けられるかについて述べている。

### 第1節 ゲーテは詩人たちの師か解放者か？

ゲーテは最初に師の役割について次のように説明している。

「われわれが師と呼ぶのは、その人の指導によってわれわれがたえずなにかある芸術の修練を重ね、しだいにわれわれが熟達してくるにつれて、実作で憧れの目標にもっとも確実に到達するために従うべき根本原則を段階的に教えてくれる人のことである」<sup>2</sup>。

すなわち、すべての芸術において、師は憧れの目標に到達するために従うべき根本原則を教えてくれる。ここでゲーテはこの目標について詳しく説明していないが、ある芸術を習得することを意味しているのであろう。ゲーテによれば、ある芸術を習得するために師の存在はとても大切だ。このことは詩作においても同じであろうか？

世界的に知られている文豪ゲーテは、詩学や詩人の師と称されることができであろう。しかし同じ随筆の中で、ゲーテは上記の引用文の意味では「(自分は) 誰の師でもなかった」<sup>3</sup>と書いている。ゲーテは自分を詩人たちの解放者と称している。彼は言う。

「そのような意味においては、私は誰の師でもなかった。しかし、一般にドイツ人、とくに若い詩人にとって私がいかなるものになったかを言うようにと求められるならば、私はたぶん彼らの解放者であると言うことができるであろう。というのも、人間は内面から生きなくてはならないように、芸術家も、たとえ彼がどんなふうに振る舞ってみたところで、つねにひたすら自らの個性を発揮してゆくほかないのだから、やはり内面から制作しなくてはならないということを、彼らは私によって知ったからである」<sup>4</sup>。

すなわち人間は内面から生きなくてはならないように、創造している芸術家は内面から制作しなくてはならない。芸術家は自らの個性を発揮していくことによって内面から制作している。

ゲーテによれば、芸術家あるいは詩人は内面から制作すべきである。ゲー

テはこのことを詩人たちに教えているゆえに、自分を「詩人たちの解放者」と称するのである。したがってゲーテは詩人たちに具体的なルールを与えないようにみえる。その代わりに、ゲーテは詩人たちには内面から制作すべきことを指導し、表現の自由を示している。

この指示をもってゲーテは詩人たちを解放し、自分を彼らの解放者と称するのである。しかしそれにもかかわらず、ゲーテを詩人たちの師としてみることができる。なぜならば、それによって詩人たちに詩作の仕方を教えているからである。ゲーテは自分がどんな態度で詩作したのかを見せてくれる。ゲーテによれば、詩作は内面から来る自然的な過程である。これについては第2章でもう少し詳しく論じる。次の節では芸術家や詩人という概念の明確化について論じ、そしてゲーテが行っている詩や芸術や学問という概念の定義についても論じていく。

## 第2節 詩人と芸術家という概念、そして詩や芸術や学問という概念の定義について

ゲーテはこの随筆の中で、詩人たちに宛てて書いている。随筆の最初の箇所だけに芸術や芸術家について述べているが、その後は詩について述べている。したがって本稿でも、以下では芸術家だけではなく、主に詩人と詩について取り上げることとする。

次の引用文は詩と芸術についてはっきり区別している。ドイツ語原文でこの引用文は『箴言と省察』と『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』と両作品にあるが、日本語版のゲーテ全集（潮出版社）では「ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代」の中だけにある。

「もしかしたら私は反対されるかもしれない。詩は芸術と考えられるし、しかも機械的なものではない、と。しかし私は詩が芸術であるとは考えない。詩は学問でもない。芸術と学問は思考によって達成できるが、

詩はそうはいかない。詩は靈感だからである。詩の気配がきざしたとき、詩はすでに魂の中に受胎されていたのだ。詩は、芸術とか学問とか呼ぶべきではなく、天性（精霊）<sup>5</sup>というべきであろう」<sup>6</sup>。

面白いことに、ここでゲーテは詩と芸術および学問全体の間をはっきり区別している。ゲーテによれば芸術と学問は思考によって達成できるが、詩の場合は違う。ゲーテにとって詩は靈感である。すなわち靈感は魂の中に受胎されるが、それは詩の気配がきざしたときである。この故に詩人はゲーテが随筆に述べているように、内面から制作している。すなわち靈感が受胎されている魂からである。ゲーテは、詩が芸術でも学問でもなく、天性だと結論する。

ここで反対できることは、芸術と学問においても天性を必要とするということである。学問におけるすべての偉大な発明が例として示すことができるといえよう。アインシュタインには学問においても靈感のひらめきと呼ばれるアイディアがあった。彼自身は発明について次のように述べている。「発明することは論理的思考の成果ではない。その最終成果が論理的な形と結ばれていたとしても」<sup>7</sup>。面白いことに、発明はアインシュタインにとっても論理的思考の結果ではなく、むしろゲーテの言葉でいうところの靈感の結果である。芸術においても同じことがいえるのである。しかし、ゲーテはここで具体的な例をあげていない。

ゲーテの「詩は芸術でも学問でもない」という主張には、説得力のある理由が存在しなければならない。彼は、詩は芸術と考えられるが、機械的なものではないことを述べている。彼にとって詩は靈感（Eingebung）と天性（Genius）である。何故ゲーテは詩と芸術および学問の間を区別したのかについては筆者の今後の課題としたい。

天性に関しては、ある定まった人だけが天性をもっていることを意味してはいない。ゲーテは『箴言と省察』で次のように書いている。

「詩的才能は農夫にも騎士にもひとしく与えられている。大切なことは、各自が自分の置かれた状態を取り上げて、これをおのれにふさわしい品位をもって取扱うということだ」<sup>8</sup>。

ゲーテによれば、農夫であれ、騎士であれ、誰でも詩人になることができる。詩的才能をどうやって取り出すことができるかという問題がこれに続くことになる。ゲーテによれば、詩的才能はこれをおのれにふさわしい品位をもって取扱うべきである。それにつづく問題は、この詩的才能という状態は詳しくはどんな状態であり、どうしたらこの状態を取り上げることができるのだろうかという問題である。

『詩と真実』でゲーテは次のように述べている。「ところで、私が愛情をこめて自分のなかに摂取したいっさいのものはすぐに詩的な形式をとったから(省略)」<sup>9</sup>——この引用文から、ゲーテには詩作に対して積極的な態度をもっていたことが解る。彼には、愛情をこめて自分のなかに摂取したいっさいのものを詩的な形式で受け入れるという習慣があった。積極的に感じたことと感情を詩の中で顕すことは詩人にとっての原動力であるといえよう。農夫も騎士も、愛という積極的感情を知覚することができるであろう。これについてゲーテは、もしかしたら詩的才能という状態として捉えたかもしれない。次の章では、これについて論じる。

本節に論じた概念の定義づけにもう一度戻って、以下では主に詩人について論じていく。何故かというところ「さらに一言、若い詩人たちのために」という随筆の中で、ゲーテは主に詩について論じ、そして上の引用文のように詩と芸術および学問の間を区別しているからである。次章では詩人はどういう風に詩作をすべきかについて検討していく。

## 第2章 ゲーテの「自然詩」 における生命哲学

本章では、ゲーテの詩作の過程を検討し、その中にある哲学を明らかにしていく。

### 第1節 詩作とは詩人が内面から制作する自然的な過程

詩人はどういう風に詩作すべきか？ゲーテは次のように述べている。

「そういう精神で芸術家が生氣潑刺とたのしく仕事にむかうならば、彼の人生の価値を高貴あるいは優雅を、時として生来彼に備わっている優雅な高貴さといったものをも、世に顕すことになるのは間違いない。」<sup>10</sup>

ゲーテは、詩人が生氣潑刺とたのしく詩作することを通して、詩人の人生の価値を顕すと確信している。そしてゲーテは、詩人の「人生の価値」を「高貴あるいは優雅さ」と、さらに「生来彼に備わっている優雅な高貴さ」と同一視している。言い換えれば、詩作や詩によって、詩人は自分の「人生の価値」、「優雅な高貴さ」とゲーテが呼ぶところのものを顕す。もし詩人は、ゲーテのように内面から制作すれば、詩人の魂あるいは心あるいは詩人の人生が、彼の作品の中に反映されると言えるだろう。何故かというとならばゲーテによれば詩の靈感は、人間の内面に、そして詩の気配がきざしたとき、魂の中に受胎されているからである。

ここでもう一度、前章で論じた詩と学問という概念の定義に戻ろう。学問は説明的で、分析的であるから、頭によって書かれていると言っていい。しかしながら詩は心から由來し、感情も感慨も許される。詩は思考を排除しないが、この意味で分析しないで、むしろ統一する要素をもっている。他方、



学問は分析し、しばしば全体の部分だけを観察する。それに対して詩は全体あるいは全体性を顕すことができる。詩は学問と同じようには最初から感情を排除しない。何故かという、証明ができる事実だけが学問の対象だからである。詩の中では感情、そして有限と無限、時間と空間という現象、また愛や慈悲という感情などが顕されることできる。詩は全体的で、人間を感動させ、統一させる力をもっている。

内面から制作することによって、芸術家あるいは詩人は常にひたすら自らの個性を発揮し明らかにしていくのである。内面からの書き方というのは、詩人が内面生活を詩を通して顕し、紙に認める過程である。芸術家もしくは詩人は、ゲーテによれば、人間が内面から生きるように、内面から制作するので、詩人は詩作を通じて人生の価値を顕す。

ここでゲーテによる人間と芸術家の間の違いについてももう少し詳しく論じてみよう。彼は述べている。

「というのも、人間は内面から生きなくてはならないように、芸術家も、（省略）やはり内面から制作しなくてはならないということを、彼らは私によって知ったからである」<sup>11</sup>

人間が内面から生きるように、芸術家は内面から制作する。内面から生きること、そして内面から制作することは、自分の直感、自分の心に従うことであり、あるいはゲーテが言うように、魂の中に受胎された自分の靈感に従うことである。

このような生き方や制作の仕方は、内面から流れてくる川と比べられる。人間の場合この川を「生命流」（生命の流れ）と、芸術家あるいは詩人の場合「制作流」（作品を作る時の流れ）あるいは「詩作流」（詩を作る時の流れ）と名付けたい（これらの表現は筆者の造語である）。「生命流」と「詩作流」の共通点は、両方が人間の内面に由来する、内面から流れ出しているという点である。両方が心からの流れ、人間の内面から来る流れを表現している。

もし人間が自分の直感に従い、内面からもしくは心から生きるならば、人間の内面に生命の流れが起源しているといつてよい。この生命流に従うことで、人間としての人生行路へ導かれる。したがって人間の人生行路はその流れの中に存在している。もし、ゲーテがそうであったように、芸術家が内面から制作することと人間が内面から生きることを同等だとすれば、芸術家の内面からの制作によって、詩作の場合と同じように、詩において流れてくる止みたい内面の生命流を記すことができると言っている。

次節では、内面から制作することによって詩人の内面生活と内面の生命流が詩に記されることについて詳しくみてみよう。

## 第2節 ゲーテの「自然詩」

内面から制作することによって詩人は自分の内面的生を記すことができる。上記したように、ゲーテは詩人が生気潑刺と楽しく詩作にむかうならば、詩人の「生の価値」を顕すと述べている。ゲーテは詩人の「生の価値」を「高貴」あるいは「優雅」あるいは「優雅な高貴さ」とも称する。そしてゲーテは、もしこういう風に、生気潑刺とたのしく内面から詩作するならば「自然詩(Naturdichtung)」が成立されると断言する。「そこから生じてくるのはいわばある種の自然詩(文学)であり、そしてこうした仕方に頼るのでなければ、独創的なものは生まれてこないのである」<sup>12</sup>。もし詩人がゲーテの指導通りに詩作するならば、独創的なものが生まれてくる。ゲーテはこのような詩作の仕方を「自然詩」と呼ぶ。言い換えれば、人間が内面から生きるように、詩人が内面から制作したり書いたりするとき、詩人は自分自身とその唯一性を顕し、したがって独創的である。「自然詩」の文字通りの意味は、詩作が「自然なプロセス」であるということである。「自然詩」とは、自然について詩作するというのではなく、詩人がゲーテの指導通りに詩作するときに自然的に通過する過程である。この自然な過程において詩人は内面から制作したり、書いたりしている。それは、人間が直感に従い、内面から生きるという

ことが自然なことであると同様である。

つまりゲーテの「自然詩」は、詩人に無制限で、自由に内的生の表現を可能にするのである。詩人はそれによって「人生の価値」と彼の「優雅な高貴さ」を顯すのである。

### 第3節 ゲーテの「自然詩」における生命哲学

詩人のなすべき制作の仕方と人間のなすべき生き方とを——しかも内面から——比べることができるので、ゲーテの「自然詩」のなかに、ある生命哲学を見出すことができる。この故に筆者はゲーテの「自然詩」における哲学を「ゲーテの『自然詩』における生命哲学」と名付ける。この生命哲学は、人間の生き方へと移ることができる詩人の振る舞いを描くのである。

同じ随筆「さらに一言、若い詩人たちのために」の中で、ゲーテの「自然詩」の中に生命哲学があることを示している文章がある。ゲーテは次のように述べる。

「ところで、なによりも肝要なことを手短かに述べておこう。若い詩人は、たとえそれがどんな形態をとるにしろ、生きて動きつづけているものだけを表現せよ。いっさいの否定的精神、いっさいの悪意や悪口を、そして否定するしか能のないものを、きびしく排除せよ。というのも、そうしたもののからは何物も生れてこないからである」<sup>12</sup>。

この明確な言明において、ゲーテによれば若い詩人にとって大切なことは、「どんな形態をとるにせよ、生きて動きつづけているものだけ」<sup>13</sup>を表現することが大切である。詩人は生氣潑刺と楽しく内面から書き、生きて動きつづけているものだけを表現すべきである。詩人はどんな形態をとるにしても、すべての生きて動きつづけているものを表現することができるために、それを知覚する力をもたなければならない。

さきに見たように、ゲーテが愛情をこめて自分のなかに摂取したいっさいのものはすぐに詩的な形式をとったように、ここでも生きて動き続けているものを愛情こめて自分のなかに摂取し、すぐに詩的な形式をとったように思われる。

ここで他の引用文を通して、生きているもの、動き続けるものについてのゲーテの見解を見てみよう。生きているもの、動き続けるものは多種多様な形態をとることができる。『始原の言葉・オルペウスの教え』注解』において次のように述べている。

「個は、たとえこのように決定されたにしても、ひとつの有限なものとして、たしかに破壊されることはありうるが、しかしその中核が厳として存在しているかぎり、幾世代を経ても粉碎されたり、寸断されたりすることはないのである」<sup>14</sup>。

ゲーテは「個性の不変性」について論じるが、この固有の印をおびた形相がその「中核が厳として存在しているかぎり」、「幾世代を経ても」生きて発展する。生きて動きつづけているものは様々な形態で表されている。その「個性の不変性」の固有の印をおびた形相は生きて発展し、ひとつの有限なものとして、破壊されることはありうる。しかしその中核は時間も世の力も毀すことができない。

詩人は、それがどんな形態で現れても、生きて動き続けているものを表現するという課題に挑む。ファウストの第一部においてファウストは次のように言う。

「まあどうだ、すべての物が集まって渾一帯を織り成し、  
一物が他の物のなかで作用をしたり活力を得たりしている」<sup>15</sup>

このファウストの言葉はゲーテ自身の考え方に適合しているように思われ

る。ゲーテによれば、一物が他の物のなかで作用したり活力したりしながら、すべての物が集まって渾一体（全体）を織り成している。あらゆる形態が固有の印をおびた形相であり、その個性を作るのである。個としては有限なものでありながら、その中核は不滅で、無限である。他の形態の中で作用したり、他の形態と共存したりし、全体を形成する。ゲーテの詩・詩作は、こうした生命の全体を含んでいると言っていい。すなわち彼の詩・詩作はホリスティックで、包括的で、すべてを包含しているのである。

ゲーテは詩人に、生きて動きつづけているすべてのものを表現する権利を与えている。それは個として有限でありながら、その中核は不滅で、空間と時間の中で永遠に存在し続けている。それによって詩人が渾一体を織り成し、生きて動きつづけているものの永遠性を有限の中で、そしてその無限性を永遠の中で表現することができる。全体は限界をもたず、無限である。これによりゲーテは詩人に、一方で有限で、必滅でありながら、他方で無限で、不滅である形態で表されている生命をあるがままに表現する権利を与えていると言えるだろう。

詩人はまず内面から制作することによって自分の生命を顕す。それと同時に詩人は生きて動きつづけているすべてのものを言葉で表現すべきである。それゆえに彼は自分の生命とまわりの生命、それどころか全体の導管である。生命は彼を支障なく通り、書かれたものの中に顕れてくる。このような詩作の仕方に流れている詩の性格があり、弛まずに流れている生命流（詩人自身の生命とそのまわりの生命）を表現している。それゆえにゲーテの「自然詩」は、生命を普遍的に叙述するものであり、そして、生命を表明する詩である。

したがってゲーテの詩作の仕方はある生き方と比較することができる。何故ならば詩人は、人間が内面から生きるように、内面から制作すべきだからである。ここにゲーテの「自然詩」における生命哲学の要素が見出せる。さらに彼の「自然詩」の中に生命そのもの、すなわち生きて動きつづけているものが表現されている。この生命は多様な形態をとり、有限でありながら、その中核が不滅で、固有の印をおびた形相を示している。ゲーテによればこ

の固有の印をおびた形相は有限であるが、その中核が不滅である。ここから、ゲーテは死を排除せずに、生命は死によって終わることなく無限に存在し続けるとゲーテは考えたといえる。

この事実はエッカーマンの『ゲーテとの対話』で確認されるところである。エッカーマンは次のゲーテの言葉を記した。

「75歳にもなると」と彼は、たいへん朗らかに語りつづけた、『ときには、死について考えてみないわけにいかない。死を考えても、私は泰然自若としていられる。なぜなら、われわれの精神は、絶対に滅びることのない存在であり、永遠から永遠にむかってたえず活動していくものだとかたく確信しているからだ。それは太陽と似ており、太陽も、地上にいるわれわれの目には、沈んでいくように見えても、実は、けっして沈むことなく、いつも輝きつづけているのだからね。』<sup>16</sup>

ゲーテは死について考える時にも泰然自若としていられる。何故なら、ゲーテはわれわれの精神が絶対に滅びることのない存在だと確信しているからである。精神の存在は永遠から永遠にむかって活動していくのである。この故に75歳のゲーテは死の後の生命、そして永遠に存在し続ける生命を信じていたから、死の恐怖がなかった。

上の引用文にあるように、ゲーテは精神が永遠に絶対に滅びることのない存在だと確信していた。彼は精神の存在を太陽の存在と比較している。太陽は沈むと見えなくなる。それにもかかわらず太陽は存在し続けている。エッカーマンの『ゲーテとの対話』の同じ個所でゲーテは述べている。「沈みゆけど、日輪はつねにかわらじ」<sup>17</sup>。太陽は沈み、次の日まで見えなくなる。次の朝にまた昇ってくる。この太陽は昨日輝いていた太陽と同じ太陽である。落日は死と、そして旭日は生命の始まりと比較することができる。もし太陽を精神の存在と比較するならば、精神は死の中にも存在し続けて、時間が経てばまた生まれてくるということができよう。

したがってゲーテの詩は生命そのものを包括するのである。空間と時間や生死や有限性と無限性の次元を包括しているのである。ゲーテ自身の生命観はこれらすべての次元を包括し、彼の詩の中においてそれらを表現へともたらし、生きて動きつづけているものすべてについて語ることができる。

筆者は、生命を顕し内面から制作するという詩人の創作のあり方と、詩人の生命の表現である詩そのものが哲学であると考え、したがって本稿タイトルを「ゲーテの『自然詩』における生命哲学」と名づけたのである。

それでは、「自然詩」はいかにして支障なく流れる生命流を表現することができるのか？この問題を次章で論じていきたい。

## 第3章 「自然詩」における 詩人の振る舞いについて

本章では、ゲーテの「自然詩」はどのように、支障なく（妨げられることなく）流れる生命流を記述しうるのかということについて探究する。詩人は支障なく流れる生命流を表現する詩を制作するのに、何に注意すべきか？この問題も「さらに一言、若い詩人たちのために」というゲーテの遺稿を手掛かりとしてみたい。ここにさらなる示唆があると思われるからである。

### 第1節 「自然詩」における自制心の役割について一否定するものを 排除する

ゲーテは若い詩人たちに次の指導を与えている。

「いっさいの否定的精神、いっさいの悪意や悪口を、そして否定するしか能のないものを、きびしく排除せよ。というのも、そうしたもののか

らは何物も生れてこないからである」<sup>18</sup>。

詩人は、詩作する時に否定的精神、悪意や悪口を、そして否定するしか能わないものを排除すべきである。さらに「悪意」、すなわちすべての嫉妬あるいは悪気あるいは恨みは、詩作において適切ではない。また「悪口」も詩作において望ましくないものである。したがってゲーテによれば、人あるいはものについて悪口を言うことは詩作から排除すべきである。

前章で既に論じたように、ゲーテの「自然詩」は、積極的で肯定的な仕方で生きて動き続けているすべてのものを表現していると要約できる。「自然詩」の詩作は、生命を肯定する営為である。この営為においては、一方で生きて動きつづけているすべてのものが表現されるべきであり、他方で一切の消極的で否定するものと一切の悪意が排除されるべきである。

次の段落でゲーテは述べる。

「私が若い詩人にいくら真剣にすすめてもすすめ足りないと思うのは、自分自身をよく見つめなければならないということである。韻をふみながら表現することがいくらか容易になったときでも、いっそうの内容の充実をはかるために、それは必要なのである。」<sup>19</sup>

ゲーテは若い詩人たちに、自分自身をよく見つめなければならないという。彼は、若い詩人たちが生きて動きつづけているものだけを表現し、一切の消極的で否定するものと一切の悪意を排除するように、彼らに自分自身をよく見つめることを勧めている。詩人は自分自身をよく見つめて、コントロールする能力をもつべきである。詩人は消極的なものを書くことを一切排除すべきであり、生きて動きつづけているものだけを表現すべきであるから、自分の考えや記す言葉をよく考えるべきである。そのために詩人は自分自身をよく知るべきだと言ってよい。自分自身をよく知るならば、よく自分を表現することもできるし、自分のまわりをよく知り、生きて動きつづけているすべ



てのものを表現することも可能になる。

詩人にとって「自然詩」を詩作するために、内面から制作することと自身自身をよく見つめることが二つの必要な条件である。言い換えればゲートの「自然詩」は自制心（自分の感情をコントロールすること、例えば消極的にならないことなど）と自己観察を必要とする直感的事業である。詩人のために必要な特質である自制心については第4章でもう一度論じる。

引用文の後半でゲートは書いている。「韻をふみながら表現することがいくらか容易になったときでも、いっそうの内容の充実をはかるために、それは必要なのである」<sup>20</sup>。詩人は韻をふみながら表現する時に、軽やかさと敏捷さに留意すべきである。詩作においては、流暢な文章で書くことが大事であり、言い換えれば重い表現は排除すべきである。詩がこのように書かれているのであれば、この詩を読むことが快適になるであろう。この詩を読むと、軽やかさと敏捷さと流れてくるものを感じるであろう。このように書かれた詩においては、生きて動きつづけているすべてのもの、そして生命実体あるいは支障なく流れる生命流がよく表現されている。消極的なもの一切を排除すべきであるから、支障なく流れることを強調するのである。

言い換えれば、悪意と悪口などの消極的なもの一切が詩人の「執筆流」を阻む。これを人間の生き方に移してみれば、悪意と悪口などの消極的なもの一切が生命流を阻むことになる。ここで「自然詩」から現実の生活へと移ることができるもう一つの共通点が明らかになった。

執筆流あるいは詩作流、生命流さえも支障なく自由に流れるべきである。詩人は韻をふみながら表現する時の軽やかさに留意しながら、詩の内容をいっそう充実すべきである。「自然詩」においては、詩の内容は重要な役割がある。充実した内容であるべきだが、しかもつねに内容をますます獲得すべきである。「自然詩」の内容はどのような内容であるべきか？ 詩の内容をどうしたらいっそう充実させることができるのか？

## 第2節 詩（文学）の内容は自己の生活（＝生命）の内容である

ゲーテは詩の内容について次のように述べる。

「ところで、詩（文学）<sup>21</sup>の内容は自己の生命（生活）<sup>22</sup>の内容である。何人もそれをわれわれにあたえることはできず、時として曇らすことはできても、侵害することはできない」<sup>23</sup>。

「自然詩」の内容は自己の生活の内容にすぎない。したがって詩人の生活が充実すればするほど、その詩の内容もいっそうに充実する。詩の内容が充実した内容になるためには、詩人の生活の内容自身も充実していなければならない。

詩の内容がいっそう充実するため、詩人の生活の内容もより充実し深くななければならない。そのため詩人にとっては、挑戦と試練で溢れる人生を送ることはやむを得ないことであろう。偉大な詩と作品は大きな試練の中のできたとさえ言えるだろう。経験豊富であること、そして挑戦と試練は偉大なものを創造するための重要な条件である。それによってのみ人生が深まり、人生の浅薄なものから離れていく。この事実はゲーテをはじめ、偉大な創造者の人生を観察することで確認することができる。ゲーテの人生は苦難で溢れていたが、それにもかかわらず彼は負けなかった。逆にゲーテはすべての悩みと苦難を自分なりにとらえかえし、それによって偉大で、時を超えた作品を創った。『若きウェルテルの悩み』というゲーテの有名な作品はその一つの例として取り上げられる。この小説においては、ゲーテが自分の失恋の経験を使いながら、それを換骨奪胎しているように思われる。

ゲーテが書いているように、詩の内容は自己の生活の内容であり、この内容は「何人もそれをわれわれにあたえることはできず、時として曇らすことはできても、侵害することはできない」<sup>24</sup>。他の人は詩の内容を曇らすことができても、侵害することはできない。他の人が詩人の気分に悪い影響を与

えることによって、詩の内容も影響を受けるであろう。しかしこの人は生活の内容である詩の内容を侵害し、停滞させることはできない。もし詩の内容が侵害されるならば、生活あるいは生命はそのままに発展をやめるであろう。しかし生命は何があっても、常に発展し続けているのである。それ故に詩の内容も常に発展し続けている。何故かという、詩の内容は詩人の内容と共に発展し続けるし、詩の内容は詩人の生活の内容だからである。この内容は時として曇らされても、侵害されることはないのである。

### 第3節 うぬぼれ—「自然詩」においても望ましくない特質

同じ随筆「さらに一言、若い詩人たちのために」の中でゲーテは述べている。

「うぬぼれ、すなわち、なんら根拠のない自己満足にすがっていると、これまでよりもいっそう痛い目にあうだろう」<sup>25</sup>。

つづいてゲーテは詩人に、詩作しながら一切のうぬぼれを排除するように戒める。詩作においてのうぬぼれは痛い目にあうかもしれないからである。

『箴言と省察』の「遺稿から」の他の箇所でもゲーテは次のようにうぬぼれについて述べている。

「うぬぼれは個人的な名誉心であり、自分の特質や功績や行為のためではなく、自分の小さい存在のためにだけ尊重されたり、敬われたり、求められたりして欲しいのである。」<sup>26</sup>

ゲーテはうぬぼれを、自分のすべてを優れて個人的な名誉心と同等にする、きわめて悪い特質と見ている。うぬぼれの人はまず自分のことを考えて、自己中心的である。苦勞せず、自分が良い振る舞いと行為をしなかったのに自分が偉いと思いこんでいる。したがって、うぬぼれはなんら根拠のない自己

満足なのである。基づくべき根拠がないのであるから、単に認められたいだけである。このようなうぬぼれは詩作において望ましくない。

ここでゲーテは改めて詩人を害する特質に注意しているが、それはこの特質がこれまでよりいっそう痛い目にあうからである。ゲーテによれば、このようなうぬぼれは見抜かれ、批判され、覆されるであろう。

第1節でみたように、ゲーテは詩人がすべての否定するものを排除するように指導している。そして本節でゲーテが詩人にうぬぼれを排除するように戒めているのをみた。「自然詩」を生活と比較してみれば、日常生活においても悪い特質は役立つよりも害するものであるように、「自然詩」においても排除すべきである。こうしてゲーテの「自然詩」において生命を論じていることが明らかになった。ゲーテの「自然詩」における生命哲学は詩作の仕方を教えるものであるが、それは生き方と比べられ、また日常生活へと移行されることができるのである。

## 第4章 自由と前進する生

本章において第1章で論じた点、なぜゲーテが自分を詩人たちの師ではなく、彼らの解放者として考えるのかという点をもう一度取り上げる。ゲーテは詩人たちには内面から制作すべきことを指導し、内面生活の表現の無制限の自由を示している。内面から制作することはゲーテが詩人たちに課した、唯一の規範である。ゲーテは詩人たちに、この自由の規範のほかに、さらなる規範を与えるのだろうか？これについて本章で見たい。

### 第1節 自由の公言は思い上がりである

随筆「さらに一言、若い詩人たちのために」の次の段落で、ゲーテは本稿の第1章で論じた若い詩人たちに与えた自由に改めて言及する。

「自分が自由であると公言するのは、たいへん思いあがったことである。というのも、それは同時に、自分で自分を御していこうとすることを表明しているからである。誰にそんなことができるであろうか。」<sup>27</sup>。

ゲーテはここでさらに人間の特質、すなわち自分で自分を御することについて書いている。この特質を自制心と呼ぶことができる。詩人たちの解放者として、ゲーテは彼らに自由を与えて、彼らはそれによって外面的ルールから解放されることになった。と同時に、ゲーテはこのような自由を公言することは思い上がることだと意識している。自分の考えと言葉をよく観察することが大事である。そしてうぬぼれも詩人を害する。自制心は詩人にとって望ましい特質の一つである。ゲーテは、詩人から要求するものが——良い生き方をする良い人間として期待される——人間から要求されることと比較できるとする。以上から、人生における道徳の一般的な規範は詩人にも当てはまる。これはゲーテの「自然詩」における生命哲学の中のもう一つの面白い観点を示している。何故ならばこの生命哲学はまったく同様に人間にも当てはまるし、日常生活にも転用されうるからである。したがって詩人はその意味で良い性格をもつべきではないか。

次にゲーテが若い詩人たちに与えるアドバイスについて考えてみたい。このアドバイスに従えば、自分で自分を御し、思い上がらないことができるということが期待される。

「この点について、私は私の友人である若い詩人たちにつぎのように言っておこう。いま、きみたちは規範というものを全然もってはいないのだ。その規範はきみたちが自分自身にあたえなくてはならないものであろう。ひとつひとつの詩について、それが体験されたものを含んでいるか、その体験が自分を進歩させたかどうかを、自分に問うてみるがよい」<sup>28</sup>。

ゲーテは詩人たちに自由を与えると共に規範についてのアドバイスを与える。すなわち彼らは自分の詩が体験されたものを含んでいるか、その体験が自分を進歩させたかどうかを自分に問うてみるべきである、と。ゲーテは詩人が体験によって成長すると仮定している。ゲーテの「自然詩」の詩は自分の体験と自分の人生を表現している。「自然詩」の内容は人生からとった、そして絵のように詩人の体験を示している。この意味でそれは写真と比べることができる。写真はある瞬間の撮影である。詩は絵のように、詩人の体験を認める。「人生の窓」とも呼ぶことができるであろう。窓が家の内面が見られるところであるように、詩は詩人の人生が見られる文章である。詩人の人生の瞬間、あるいは、その人生の一段落の撮影であると言っていい。もちろん、この体験は日常生活の体験だけではなく、精神的な体験でも精神的な成長でもある。この体験は人間が体験できることすべてを含むが、ただしゲーテはこの体験が自分を進歩させることを前提としている。

次の段落で、ゲーテは詩人が自分を進歩させない例を取り上げる。

「もしもきみたちが、恋人が遠く離れて行ったために、裏切ったために、あるいは死んだために恋を失ったとっていつまでも嘆き悲しんでいるようなら、きみたちには進歩がないことになる。たとえきみたちがどれほど才能をかたむけ、技巧をこらしたにしても、その作品は一文の値打もないのだ」<sup>29</sup>。

ゲーテは常に、失ったものを嘆き悲しむべきではないと言っている。ここではゲーテは失った恋人について語っている。ゲーテによれば、詩においても現実の人生においても、絶えず悲しみを表現することは、ゲーテの目から見れば価値がないのである。悲しい体験はいつか乗り越えて、進むべきである。「自然詩」を通して、詩人は悲しい出来事を精神的に消化することができるであろう。悲しみの中に立ち止ったり、沈んだりしてはいけない。この

悲しみをばねとして進歩させる体験に変えることが大事である。あらゆる苦しい体験を新しくとらえかえし、朗らかに自分を進歩させる新たな体験をしていくことである。随筆の最後の段落で、ゲーテはどのような風によつてこのような禍・難を乗り越えるのかについて述べている。次節では、これについて検討したい。

## 第2節 前進する生を支えとする

詩人は失った恋人を嘆き悲しむ代わりに何をすべきか？ 随筆「さらに一言、若い詩人たちのために」の最後の段落でゲーテは次のアドバイスを与えている。

「前進する生を支えとし、折にふれて自分をためしてみよ。というのも、そうすればたちまち、われわれが生きているかどうか証明されるからであり、またあとから振り返ってみたときに、われわれが生きていたかどうか明らかにされるからである」<sup>30</sup>

彼は詩人に、前進する生を支えとするように激励している。したがって彼らは前向きに生きるべきである。言い換えれば、ゲーテは詩人たちを、過去・後ろを振り向かず前を見ながら、すべてを乗り越えて、自分を進歩させる体験に形成するように励ましている。ゲーテによれば、悲しい出来事も自分を成長させる体験に形成しなまし、人生を充実させることができる。詩人の人生の内容がいっそう充実すると、彼の詩の内容もいっそう充実する。

詩人は常に前進する生を支えとすべきである。そうすれば彼はもっとも充実した瞬間を生きることができる。過去に立ち止ることでもなく、常に将来を見つめ夢を描くでもない、今の瞬間において心をこめて生きることである。今の瞬間に一生懸命生きることである。そのためには上でみたように自己観察は不可欠である。そして自分の行動についての自己反省も必要である。こ

れらによって詩人は自分をよりよく知ることになるからである。

もし詩人がこのような生き方をするならば、それは彼の作品の中にも顕される。体験や経験は詩人の知覚の仕方によって記されて、伝えられるのである。このように詩人は人生や生命を含んだ、そして人生を語る詩を制作する。人生・生命を含んだ詩は、読者にこの瞬間の感情を伝える。読者は「自然詩」を読むと、詩人が詩を書いたその場とその時に感じたことに同感することができる。したがって「自然詩」の詩は、詩人の命と読者の命の間の仲介役になるのである。

## おわりに

本稿ではゲーテの「文学論」から、随筆「さらに一言、若い詩人たちのために」を取りあげて分析することで、いくつかの答えを見出すことができた。随筆「さらに一言、若い詩人たちのために」は、ゲーテの詩・詩作に秘められている哲学の概観を示しているといえよう。

本稿では、第1章では、まずゲーテが詩人の世界の中で自分をどう位置付けられるかについて述べ、次に芸術家や詩人、そして詩や芸術や学問という定義の明確化について論じた。第2章では、まず詩作は詩人が内面から制作する自然的な過程であることを述べ、次にゲーテの「自然詩」という概念を検討し、そしてゲーテの「自然詩」における生命哲学を明らかにした。次に第3章では、「自然詩」における詩人の振る舞い、特に自制心とうぬぼれについて述べ、そして「自然詩」の内容を明らかにした。最後に第4章では、詩人たちには内面から制作する自由があるが、詩人たちはどうすべきかについて論じ、そしてゲーテが詩人たちに与えた自由の他に規範があるかどうかについて検討した。

詩という文学的芸術の中に哲学を表現することができるかどうかという問題は筆者の基本的な問いである。もしこのことが可能であるならば、詩に顕されている哲学はどういう哲学であろうか。この問題に対し、筆者は一つの



観点から接近しようとした。つまり本稿において、ゲーテの作品、とくに詩・詩作においてある哲学を見つけることができるかどうかを検討した。この観点からの検討によって、ゲーテの詩・詩作の中に哲学が表現することができること、そしてゲーテの詩・詩作において哲学があること、この両者が成立することが明らかになった。

以上のことから、ゲーテの「自然詩」の詩作の仕方は生き方と比べることができることがわかる。何故かというと詩人は人間が内面から生きるように、内面から制作すべきであるからである。ここにゲーテの「自然詩」における生命哲学の要素が見つかるのである。このような生き方や制作の仕方は内面から流れてくる川と比べられる。人間の場合この川を「生命流」（生命の流れ）と芸術家あるいは詩人の場合「制作流」あるいは「詩作流」と名付けた。「生命流」と「詩作流」の共通点は、ともに人間の内面に由来し、内面から流れていることである。

以上のことから、ゲーテの詩は生命そのもの、そして空間と時間や生死や有限性と無限性の次元を包括しているように思われる。何故かというとゲーテの「自然詩」はそれらすべての次元を包括し、その詩の中で、生きて動きつづけているものについて書いているからである。筆者は生命を顕し内面から制作する詩人の制作の仕方と生命の表現である詩人の詩そのものが哲学であると考える、本校のテーマを「ゲーテの『自然詩』における生命哲学」と名づけたのである。

ゲーテの「自然詩」における生命哲学の中に、筆者はもう一つの興味深い観点を見つけることができた。つまり、人生における道徳の一般的な規範は詩人にも当てはまるように思われるという点である。何故かといえば、この生命哲学は人間にも当てはまるし、日常生活で用いられるからである。以上のことから詩人はある意味で良い性格の人（消極的なものを排除し、うぬぼれをもたず、思い上がらない人、自制心をもち自己観察ができる人、生活の内容自身が充実しているとともに、いっそう充実させる人、前向きであり、自分の体験を生かすことができる人）であるべきことが結論づけられる。

今後の課題は、ゲーテの「自然詩」における規範の概念をより詳細に探究し、実例を通して考察していくことである。そして「ゲーテの『自然詩』における生命哲学」というテーマを、ゲーテの他の作品によってさらに詳細に探求する必要がある。

# 注

- 1 Goethe Werke. *Versepen. Schriften. Maximen und Reflexionen*. Hrsg. von Friedmar Apel. Band 6, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 2007, S. 374-375. 訳は下記参照。  
ゲーテ (1980)『ゲーテ全集 13』文学論・箴言と省察 小岸昭訳 岩崎英二郎・関楠生訳 潮出版社 89～91 ページ
- 2 Goethe Werke, Band 6, S. 374.『ゲーテ全集 13』89 ページ
- 3 同上
- 4 同上
- 5 翻訳注 ここで「精霊」を「天性」に入れ替えた。
- 6 Goethe Werke, Band 6, S. 526. 訳は下記参照。  
『ゲーテ全集 13』89 ページ、ゲーテ (1981)『ゲーテ全集 8』ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代・第3巻 登張正実訳 潮出版社 418 ページ
- 7 独和訳 Seelig (Hrsg.): *Helle Zeit – dunkle Zeit, in memoriam Albert Einstein*. Europa Verlag, Zürich, 1956, S. 10.
- 8 Goethe Werke, Band 6, S. 522.『ゲーテ全集 13』343 ページ
- 9 Goethe Werke. *Dichtung und Wahrheit*. Hrsg. von Klaus-Detlef Müller. Band 5, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 2007, S. 571. 訳は下記参照。  
『ゲーテ全集 10』詩と真実 河原忠彦・山崎章甫 潮出版社 188 ページ
- 10 Goethe Werke, Band 6, S. 374.『ゲーテ全集 13』90 ページ
- 11 Goethe Werke, Band 6, S. 374.『ゲーテ全集 13』89 ページ
- 12 Goethe Werke, Band 6, S. 374.『ゲーテ全集 13』90 ページ
- 13 同上
- 14 Goethe Werke, Band 6, S. 317.『ゲーテ全集 13』67 ページ
- 15 Johann Wolfgang von Goethe: *Faust. Der Tragödie Erster Teil*. Philipp Reclam, Stuttgart, 2000, S. 15. 訳は下記参照。  
ゲーテ (1958)『ファウスト第一部』相良守峯訳 岩波文庫 38 ページ
- 16 Johann Peter Eckermann: *Gespräche mit Goethe*. Philipp Reclam, Stuttgart, 1994, S. 123. 訳は下記参照。  
エッカーマン著 (2001)『ゲーテとの対話 (上)』山下肇訳 岩波文庫 145 ページ

- 17 *Gespräche mit Goethe*, S. 123. 『ゲーテとの対話 (上)』 145 ページ
- 18 Goethe Werke, Band 6, S. 374. 『ゲーテ全集 13』 90 ページ
- 19 Goethe Werke, Band 6, S. 375. 『ゲーテ全集 13』 90 ページ
- 20 同上
- 21 翻訳注 ここで「文学」を「詩」に入れ替えた
- 22 翻訳注 ここで「生活」を「生命」に入れ替えた
- 23 Goethe Werke, Band 6, S. 375. 『ゲーテ全集 13』 90 ページ
- 24 同上
- 25 Goethe Werke, Band 6, S. 375. 『ゲーテ全集 13』 90 ページ
- 26 独和 (筆者) 訳 Johann Wolfgang von Goethe: *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen. Aus dem Nachlass*. Carl Hanser Verlag, München, 1991, S. 870.
- 27 Goethe Werke, Band 6, S. 375. 『ゲーテ全集 13』 90 ページ
- 28 Goethe Werke, Band 6, S. 375. 『ゲーテ全集 13』 91 ページ
- 29 同上
- 30 Goethe Werke, Band 6, S. 375. 『ゲーテ全集 13』 91 ページ

#### 参考文献

##### 〔ドイツ語文献〕

- Goethe Werke. *Dichtung und Wahrheit*. Hrsg. von Klaus-Detlef Müller. Band 5, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 2007.
- Goethe Werke. *Versepen. Schriften. Maximen und Reflexionen*. Hrsg. von Friedmar Apel. Band 6, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 2007.
- Immanuel Kant: *Zum ewigen Frieden*, Philipp Reclam, Stuttgart, 1984.
- Johann Wolfgang von Goethe: *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen. Aus dem Nachlass*. Carl Hanser Verlag, München, 1991.
- Johann Wolfgang von Goethe: *Die Leiden des jungen Werther. Nachwort von Ernst Beutler*. Philipp Reclam, Stuttgart, 2001.
- Johann Wolfgang von Goethe: *Faust. Der Tragödie Erster Teil*. Philipp Reclam, Stuttgart, 2000.
- Johann Peter Eckermann: *Gespräche mit Goethe*. Philipp Reclam, Stuttgart, 1994.
- Richard Friedenthal: *GOETHE. Sein Leben und seine Zeit*. R. Piper & Co. Verlag, München, 1963.
- Seelig (Hrsg.): *Helle Zeit – dunkle Zeit, in memoriam Albert Einstein*. Europa Verlag, Zürich, 1956.

##### 〔日本語文献〕

ゲーテ (1979)『ゲーテ全集 1』神と世界 田口義弘訳 潮出版社

ゲーテ (1981)『ゲーテ全集 8』ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代・第3巻 登張  
正實訳 潮出版社

ゲーテ (1980)『ゲーテ全集 10』詩と真実 河原忠彦・山崎章甫 潮出版社

ゲーテ (1980)『ゲーテ全集 13』文学論・箴言と省察 小岸昭訳 岩崎英二郎・関楠  
生訳 潮出版社

ゲーテ (1958)『ファウスト第一部』相良守峯訳 岩波文庫

エッカーマン著 (2001)『ゲーテとの対話 (上)』山下肇訳 岩波文庫

R. フリーデントール (1979)『ゲーテ—その生涯と時代』平野雅史等 講談社

カント (2006)『永遠平和のために・啓蒙とは何か』中山元訳 光文社